

# 彦根駅前 Q&A

## Q. 武士にはどんな身分があったの？

**A.** 江戸時代の武士は、身分によって住む町が異なりました。三筋町や水流町などに住む中級武士は、領地を持ち、馬に乗ることが許されていました。七十人町などに住む下級武士は歩行者と呼ばれ、給与は米の現物支給で、馬に乗らない歩兵でした。足軽は、弓・鉄砲などの戦闘集団で、北組などの組屋敷に集住しました。さらに身分の低い中間は非戦闘要員で、長屋に住んでいました。

## Q. 駅ができて彦根はどう変わった？

**A.** 明治時代、失業した士族が城下町を離れるようになり、彦根は衰退の一途を辿りました。明治 22 年に東海道線が全線開通し彦根駅ができると、製糸業がさかんになったこともあり、人口が増加するようになりました。城の見える駅前通りが整備され、駅から近いところに新しい港（彦根港灣）が建設されました。城下町彦根は、近代都市としての再出発を遂げたのです。

## Q. この地域にゆかりの人物は？

**A. 藤原不比等** (659 ~ 720)  
藤原鎌足の子で、飛鳥・奈良時代の政治家。近江に領地を持ち、淡海公といわれた。芹川町に屋敷を持ち、慈眼院の前身の養花院を建立したと伝えられている。

**森川許六** (1656 ~ 1715)  
松尾芭蕉の弟子で、蕉門十哲の一人に数えられるほどの俳人。300石の彦根藩士。俳諧のほか、絵画・書・剣・槍・馬術にすぐれ、龍潭寺のふすま絵を手がけている。墓所は長純寺。

**絹屋半兵衛** (1791 ~ 1860)  
呉服と古着を商う船町の商人。1829年、湖東焼の生産を始める。利益が少なく共同出資者が撤退する中でも試行錯誤を続け、独特の味わいの焼き物を作り出した。1842年、藩の直営となる。

**谷鉄臣** (1822 ~ 1905)  
東新町の医師渋谷家に生まれ、彦根で初めて種痘を行うなど医師として活躍。その学識を買われて 1863年に藩士となり、伊藤博文ら討幕派との対外交渉を担当した。

**中川祿郎** (1796 ~ 1854)  
薩摩村(彦根市薩摩町)出身の藩士で、藩校弘道館の教授。漁村とも称した。長崎で西洋事情を学んだことから、1853年のペリー来航時に開国論を主張。井伊直弼に大きな影響を与えた。

## ぶらひこねマップ的 まち歩きのポイント

### 1. 町割は江戸時代のまま！

建物は建て替えられても、ほとんどの道路は「御城下惣絵図」のまま残っています。水路は暗渠になっているところもありますが、ほぼ江戸時代と同じところを流れています。

### 2. 路地はワンダーランド！

路地に入ると、そこには表通りとは違った空間があります。古い民家、お地藏さん、路地園芸、暗渠、野良猫など、路地ならではの雰囲気を楽しみましょう。



### 3. 小さな発見を楽しもう！

古民家の屋根の上にある鍾馭さんや七福神、道端で歴史を刻む石碑、ちょっと不思議な構築物など、まちには発見がいっぱいです。



※路地は生活の場です。マナーを守って散策しましょう。

## 彦根駅前マップへのアクセス



## 「ぶらひこねプロジェクト」とは？

まち遺産ネットひこねは、彦根のまちに残る歴史的な遺産を再発見し、紹介していく市民団体です。これまでに「鐘馭さんマップ」「彦根城外堀マップ」「花しょうぶ通りマップ」「七曲がりマップ」「伝馬町・川原町マップ」「本町・魚屋町マップ」を制作し、古地図を使ったまち歩きの楽しさを発信しています。

まち遺産ネットひこねホームページ  
[http://www.geocities.jp/machiisan\\_hikone/](http://www.geocities.jp/machiisan_hikone/)



2014年11月1日 初版発行

制作 まち遺産ネットひこね (文・写真 鈴木達也)

### 参考文献

『新修彦根市史 第10巻 景観編』(彦根市, 2011年) / 『新修彦根市史 第11巻 民俗編』(彦根市, 2012年) / 『彦根 明治の古地図 三』(彦根市, 2003年) / 『彦根の民家』(彦根市教育委員会, 1980年) / 『彦根の先覚』(彦根市立教育研究所, 1987年) / 柴田實監修『日本歴史地名大系 25 滋賀県の地名』(平凡社, 1991年) / 彦根史談会編『城下町彦根一街道と町並』(サンプライズ出版, 2002年) / 矢部真一『彦根古城の秘史』(彦根史談会, 1964年)

このマップは、彦根城フェス公募イベントの一環として、彦根市の助成を受けて制作しました。「御城下惣絵図」は、彦根城博物館の許可を得て掲載しています。



# 彦根駅前マップ

Hikone Ekimae map



## 古地図で楽しむまち歩き ぶらひこねマップ コース 7

彦根駅前の通りは、ビルや飲食店が建ち並ぶ現代的な市街地になっています。しかし、それは表の顔に過ぎません。

路地に一歩足を踏み入ると、江戸時代の町割がそのまま残り、今もそこに人々の暮らしがあるのです。

古地図と見比べながらまちを歩き、路地に残る城下町の遺伝子をたどってみましょう。

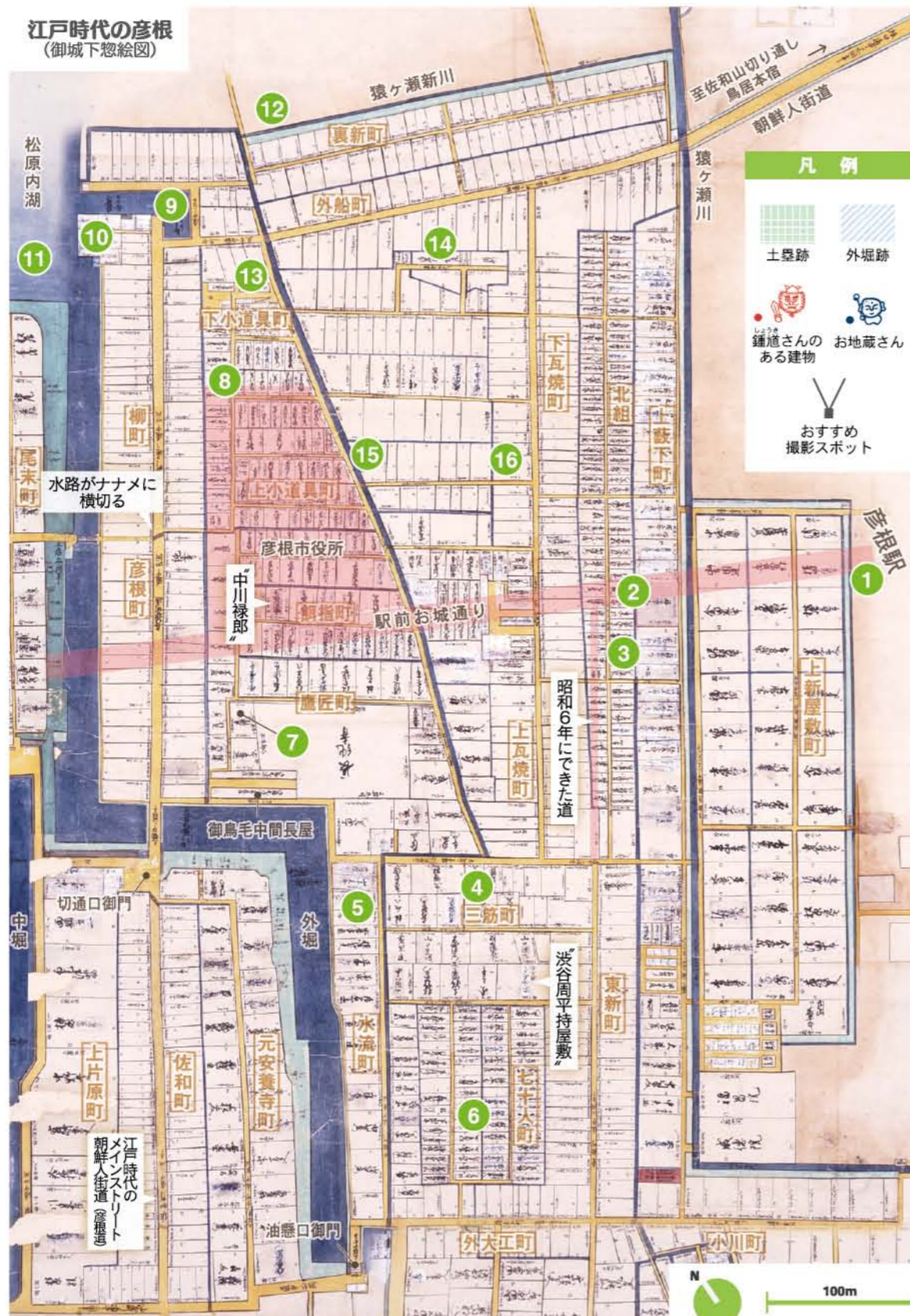




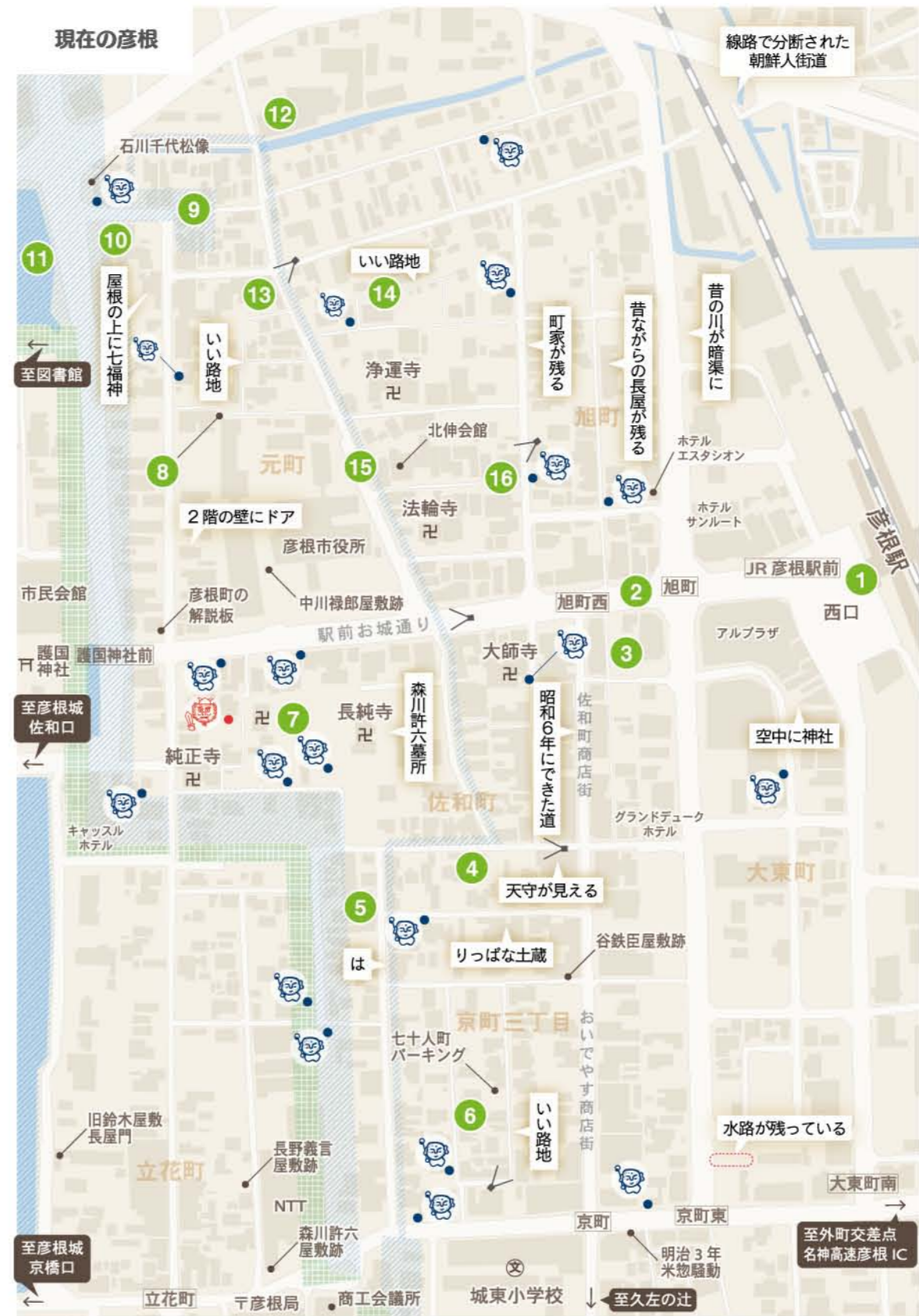
「御城下惣絵図」とは？

江戸時代の彦根城下町の様子をもっと詳しく伝える古地図。天保7(1836)年、彦根藩の普請奉行らによって作られました。屋敷の持ち主の名前が書かれているのは武家屋敷や寺院など、書かれていないのは町人の住まいです。道幅や堀幅、屋敷の間口などの寸法まで書かれています。彦根城博物館所蔵。

江戸時代の彦根  
(御城下惣絵図)



現在の彦根



中村商家保存館

彦根を代表する江戸時代の町家。明治初期まで酒蔵業、昭和25年まで酒屋を営む。内部は有料で公開され、商家の暮らしを体感できる。



芹川の旧流路

彦根城築城以前、芹川は現在の花しょうぶ通り付近から北へ流れ、松原内湖に注いでいた。町を斜めに流れる水路は、かつての流路のなごりである。



御馬取長屋跡

馬取は13俵1人扶持の武家奉公人。下瓦焼町の路地裏に長屋があった。現在は昭和らしい雰囲気路地が残る。



絹屋

江戸時代の呉服商の町家。1829年、当主の絹屋半兵衛が湖東焼を始めた。角地に合わせてつくられた複雑な屋根が美しい。



猿ヶ瀬新川

城下町北端の裏新町(北新町)と村を区切る川が残っている。城下町東端を流れる猿ヶ瀬川から分かれ、松原内湖に注ぐ。



旧彦根港湾

御舟入を拡張して昭和2年に完成。琵琶湖から松原の回転橋を経て、遊覧船が港湾を行き来した。昭和44年、新彦根港(松原町)完成に伴い廃止。



千代宮常夜灯

かつて柳町北端の御舟入の岸に町名の由来となった柳があったが、昭和25年の台風で倒れた。柳の下にあった石灯籠が場所を移して現存。



御舟入跡

琵琶湖から松原内湖を経て、城下町に船が着いた物流の拠点。大正9年から昭和2年にかけての彦根港築造工事で埋め立てられた。



大蔵省用地の碑

現在の市役所敷地は、明治45年から専売局(煙草)、昭和19年から印刷局(紙幣)の工場だった。印刷局時代の遺物がひっそりと残っている。



慈眼院

藤原不比等が建立した養花院がルーツ。境内に残る玉ノ塚は、不比等の娘千代姫の墓と伝わる。江戸中期に焼失したが、昭和10年に再興された。



七十人町

七十人歩行が住んだ武家屋敷地。旗奉行の配下の下級武士で、小さな70軒の屋敷が密集していた。1棟だけ当時の建物が残っている。



水流町

江戸時代は50石前後の武家屋敷地。通り沿いに水路が流れており、現在は暗渠になっている。芹川の旧流路が町名の由来か。



彦根駅

東海道線全線開通の明治22年に開業。当時は青波村の一部だった。現在の駅舎は昭和56年に建てられたもの。駅前には初代藩主井伊直政の銅像が立っている。



駅前お城通り

彦根駅の建設とともに、駅と城を結ぶ新しい道がつけられた。当初の道幅9mは市街地で最大級だった。昭和56年に現在の道幅23mに整備される。



北組足軽組屋敷跡

城下町の東側を守る足軽組屋敷。当時の建物はほとんど現存しない。駅前通りで分断されているが、狭い道幅はそのまま。3ヶ所の十字路には辻番所もあった。



三筋町

三筋の道から成る町で、300石未満の武士が住んでいた。主屋と長屋が現存する貴重な武家屋敷が残っている。